



曹洞禅ジャーナル

DHARMA EYE

News of Soto Zen Buddhism: Teachings and Practice

北アメリカにおける曹洞宗国際布教90周年を迎えて p1
ルメー大岳

菩薩と出会う p3
島崎敬三

国際シンポジウム基調講演 p7
上田紀行

プロジェクトダーナ p22
中出慈光

坐禅への脚注集 (2) p25
藤田一照

法
眼

Number

29

2012年3月



北アメリカにおける 曹洞宗国際布教 90周年を迎えて

国際布教総監 ルマー大岳
曹洞宗北アメリカ国際布教総監部

北アメリカにおける今日の曹洞宗の活動とロサンゼルスで禅宗寺が開創されたことと、それがどのようにつながっているのかということについて、よくご存知のかたもおられます。しかし、多くの『法眼』の読者にはそれほど知られていないでしょう。本年、私たちは北アメリカにおける曹洞宗国際布教90周年を迎えます。また同時に禅宗寺が開創されてから90周年でもあります。ここで、このつながりについての概要をお伝えしたいと思います。

曹洞宗の教えは、磯部峰仙老師によって1922年にアメリカ合衆国本土に正式にもたらされました。磯部峰仙老師は、大本山永平寺の貫首であった日置黙仙禅師、また大本山總持寺の貫首であった新井石禅禅師より、日系移民に布教するためにアメリカ合衆国本土に行くことを要請されました。当時、磯部老師はハワイで曹洞宗の布教活動に従事していました。ロサンゼルスとサンフランシスコに赴いた際に、ロサンゼルスで布教活動をする必要があると判断し、1922年に禅宗寺を開創しました。最初の場所は、ロサンゼルスのリトル東京地区の2番通り334番地にある長崎豊吉氏の家の2階を改修した場所でした。その後、檀信徒の懸命な働きによって禅宗寺は、現在の場所であるヒューイト通り123番地の煉瓦作りの建物に移りました。第二次世界大戦中は、アメリカ西海岸のすべての日系人が強制収容所に送られ、禅宗寺は一時的に

閉鎖されました。1945年8月に、収容所から戻った桑原フランク氏と長崎豊吉氏を含む檀信徒は、禅宗寺の復興に尽力しました。この間お寺は、収容所から戻って来た日系人のための一時的な避難所として機能していました。

1934年、磯部老師はさらにサンフランシスコに桑港寺を開創しました。現在北アメリカにおける日系人のためのお寺は、禅宗寺、桑港寺、モンテベロ市にある曹禅寺、モントレイ市にあるモントレイ禅宗寺、そしてロングビーチ市のロングビーチ仏教会の5つです。これらはすべてカリフォルニア州内にあります。

一般的に言えば、これらのお寺は、葬儀や法事、そして他の年間法要を行い、日本のお寺と同じ機能を果たしており、その意味でよく似ています。また、そこでは、写経、武道、生け花、茶道そして和太鼓演奏など日本の芸術や文化を教えたり、練習する場として利用されています。

1960年代には突如として、アメリカの一般大衆の間で禅仏教に対する興味が格段に広がりました。いわゆる「カウンターカルチャー(反体制文化)」とよばれる若者たちは、新たな社会を構築するための道をなんとか見出そうとしていました。とりわけ彼らは、ベトナム戦争、人種差別、貧困、公害問題などへの解決策を探していたのです。1960年代から1970年代にこのグループの人々の心を動かしたのは、特に坐禅と、只管打坐という道元禅師の教えを通じて達成することができる非二元的な智慧への関心でした。彼らは、禅が強調する自然と調和したシンプルな生活、仏教が平和な宗教として知られていること、日本のさまざまな芸道のなかに見出される禅の美学にも魅力を感じました。

鈴木俊隆老師は、1959年に桑港寺の住職となるために渡米しました。桑港寺は、ブッシュ通りにあった元ユダヤ教の集会場から始まりました。そこは鈴木老師の指導の下、若いアメリカ人が坐禅をし、仏教を学ぶ場となっていました。鈴木老師のもとに集まった、主に白人からなるそのグループは、1962年にサンフランシスコ禅センターを創立しました。その後、サンフランシスコ禅センターは成長を続け、1967年にタサハラ禅センターを創設しました。1969年には、その後のサンフランシスコ禅センターのシティーセンターになる建物をページ通り300番地に購入しました。

ほとんどの禅センターの活動は、坐禅、仏教のさまざまな側面について学ぶための諸々のコース、摂心、絡子や坐蒲、お袈裟を縫ったり、刑務所やホスピス、ホームレスの人々に対する奉仕活動をするといったさまざまな活動を行う場を人々に提供することに焦点を置いています。

前角博雄老師は、ホワイトプラム・アサンガというアメリカにおける禅の重要な法系を創設したもう一人の日本人宗侶です。1956年に禅宗寺へ派遣された前角老師は、工場でパートタイマーとしても働きました。1960年代初期に、彼はアメリカの学生のために禅宗寺で坐禅指導を始め、最終的にはロサンゼルス市にロサンゼルス禅センターと、アイディルワイルドの近くにある禅マウンテンセンター陽光寺を創立するに至りました。彼は、ホワイトプラム・アサンガを作った12人の法嗣を残しました。この法系は今やアメリカ中に広がり、社会参加型仏教、家族ぐるみの活動、禅と芸術、そして伝統的な禅修行などの幅広い活動を行う指導者たちを擁する組織となっています。

アメリカにおける他の重要な法系は、片桐大

忍老師によって創設されました。片桐大忍老師は1963年に禅宗寺に駐在する僧侶となるために、日本の曹洞宗宗務庁から派遣されてきました。1965年に彼はサンフランシスコの鈴木老師を補佐するために桑港寺に移りました。その後、1972年に片桐老師はミネアポリスに移り、そこで自身が堂頭となる、ミネソタ禅メディテーションセンターを創設しました。片桐老師は1990年に遷化されましたが、12人の法嗣を残し、その人達の多くは現在彼ら自身の禅センターの堂頭になっています。

今年の9月8日、9日にアメリカにおける曹洞宗国際布教と禅宗寺開創90周年の記念式典を開催します。皆様もどうぞご参加ください。

90周年記念とはもちろん、過ぎ去った90年を振り返る機会というだけでなく、2022年に開催される100周年に向かって将来を見据える機会でもあります。1922年に日系移民が外国の土地で自分たちの生計をたてるのに苦勞していたときには、誰一人として、将来、日本の仏教宗派の中で曹洞宗が、アメリカの一般大衆の間に広まり、最も成功する宗派になるということを想像できなかったでしょう。現在、私たちの北アメリカ国際布教総監部の管轄は、北はカナダ、南はパナマにまでおよんでいます。宗務庁に登録されている僧侶は360名を越え、特別寺院として26の寺院と禅センターが宗務庁に登録されています。さらに、北アメリカにあるすべての曹洞宗系の禅センターを数えれば、その数は300を越えるものとなります。磯部老師がおこなった禅宗寺での精力的な活動は小さな種でしたが、現在ではそれがすくすくと育って、何百もの曹洞禅という花としてアメリカ本土で開きつつあるのです。



菩薩と出会う

島崎敬三特派布教師
北海道・長林寺住職

2011年5月26日

アメリカ合衆国ペンシルバニア州
ピッツバーグ禅センター

皆さん、こんばんは。

曹洞宗は日本においては、既成教団、仏教教団で最大の教団です。道元禅師が開かれまして、道元禅師から数えまして4代目の禅師、瑩山禅師がお広めくださったのが、我が曹洞宗でございます。2つの本山がありまして、1人ずつ禅師様がいらっしゃいます。この禅師様が2年に1度交代して、曹洞宗「管長」禅師という役に就任いたします。本年度は大本山總持寺禅師様、江川辰三禅師様が管長猥下でございます。全国の15,000のお寺、800万の檀信徒、世界のご信者様に対しまして猥下から年に1度、お言葉がございます。そのお言葉をこれからお読み致します。皆様に禅師様のお言葉を聞いていただきたいと存じます。

管長告諭 曹洞宗管長 江川辰三

私たちをとりまく社会は、今、混迷を深めています。地球温暖化をはじめ、戦争、貧困などの諸問題、国内では「格差社会」「無縁社会」とも言われ、年間3万人を超える自死者、いじめや虐待など、いのちの尊厳が失われ、人びとは不信と不安の中にあります。

曹洞宗は、これまで「人権の尊重、平和の確立、

環境の保全」を願い、「絆」を深める取り組みを進めてまいりました。本年度は日常生活の中でより具体的に展開するため、「向きあう」「伝える」「支えあう」という3つの柱を立て、四摂法の「利行（利他行）」を目標に掲げました。

道元さまは、「利行は一法なり、あまねく自他を利するなり」と示されました。

瑩山さまは、「常に大慈大悲に住して、坐禅無量の功德、一切衆生に回向せよ」と諭しておられます。

み仏とご先祖さまのみ前で、姿勢を正し、呼吸を調べ、ひととき心静かに坐りましょう。大慈大悲の坐禅はおのずから「利行」に力を与えてくれます。

「あなたと向きあい、あなたと正しい教えを伝えあい、あなたと共に支えあう」ことで、一人ひとりのいのちを生かす社会がひらかれます。

日々、他を思いやり共に生きる「利行」の実践を重ねましょう。

南無釈迦牟尼仏

これより、このお言葉に沿いましてのお話しをさせていただきます。

ここに利行という言葉がございますが、利行とは菩薩の行いとされております。道元禅師様は、人として生まれ、苦しみの多い私たちの住む娑婆世界において、人間として最高の生き方は、菩薩行をすることにつきると悟られました。仏教は私たちを仏の子ということで、位置づけてくれます。仏とはどういうかたをいうのか。それは、欲におぼれず、人の幸せを願い、人の幸せがどうしたら達成できるか考え、共に正しく明るく、仲良く生きているかた、静かにほほえんでいるかたを仏のような人といい

ます。皆様はどのようなかたを仏さまとイメージいたしますか。私は自分の母親が菩薩様と思うのです。菩薩様は4つの行いがございます。

1つには布施。布施とは、物でも心でも教えでも、惜しみなく相手にあげる。施すというのが布施であります。お母様が赤ちゃんにおちちを飲ませる時に、自分は何も食べていなくても、お腹がすいて本当に辛い時でも赤ちゃんにおちちを与え、そして赤ちゃんが満足した顔を見て、お母さんは心が豊かになります。また、お父さんが子どもが歩くのが危ないと思い、庭の穴を一生懸命になって埋め、そして見知らぬ他の人の為に、川に橋をかけるのも布施であります。次は愛語といいます。相手の幸せを願い、元気のつくような優しい言葉をかける。また厳しく将来に対しまして叱るということも愛語です。そして利行というのは、自分の幸せをちょっと後にしても、相手のために尽くすことを利行と申します。お母さんが赤ちゃんのおしめを変える時に、便をとり、おしっこを変え、そのたびに今度大きくなったらこれで101回もとったんだから、お前は必ず101回の孝行をしなさいという母親はいません。そしてこの3つの布施、愛語、利行は上から下に施すのではなく、同じ命の人間としてさせてもらうという謙虚な気持ちで行うのが同事と申します。私はあんまり母に愛されなかったというかたがいますが、人間は生まれたとたんは目が見えず、泣くことしか出来ないのがありますから、お母さんが1時間も目を離したら、赤ちゃんは生きていられないのです。馬や牛は産み落とされてから30分以内にもう立ってはねることも出来ますが、赤ちゃんは、大変時間がかかるのであります。この世の中に母の愛がなければ、どなたも誕生しておりませんし、今まで命を繋ぐこともできないはずです。菩薩の行いとは自分の子どもだけに注ぐ愛ではあり

ません。人間だけではなく、生きとし生けるものの幸せを願い、このような、布施、愛語、利行、同事をなさるかたが本当の仏でございます。

こちらに入って来まして、三拝をいたしました時に、大きな犬がそこにいました。名前はマヤというんだそうです。マヤとはお釈迦様のお母さんの名前ですね。お釈迦様のお母様は、自分の国に帰って赤ちゃんを産もうとして、ルンビー二の花園を通っている時に、陣痛があり、お釈迦様をその場で産んだのです。外での出産ですから、水などありません。赤ちゃんが生まれた時には産湯を使います。その水さえなかったのですから、天に龍が2匹出て来まして、龍の口から甘い水をお釈迦様、赤ちゃんにかけたといわれております。その時に生まれたばかりの赤ちゃんが、7歩歩いて天と地を指さして「天上天下唯我独尊」と言われたそうです。仏教は大変科学的で医学的な教えですので、これは比喻といひまして例えでございませう。ご存じのようにインドは大変厳しい、身分制度がございまして、そのかたの能力、努力に関わらず、生まれてから死ぬまでその身分から抜け出せないで、苦しんでいる人々がお釈迦様の時代にも沢山いました。妻子を捨て、6年間の苦行をし、35歳で生きたまま如来になった釈迦牟尼仏陀は、80歳で亡くなるまで45年間、インド各地を歩き、この身分制度から多くの人々を救おうと努力されたのであります。ですから、生まれたばかりの赤ちゃんが天にも地にも我れひとり尊いと言ったことは、人間を含むすべての命が尊いのだといったお釈迦様の教えに沿った言葉でありますし、7歩歩いたのは生きとし生けるもの、すべての命を救おうという願いの中で、インド中を歩いたということからつけられたそういうお話だと私は思っております。

お釈迦様のお母さん、マヤさんは先ほどいったように外でのお産でしたから、病気にかかり、お釈迦様を生んだ7日目に亡くなりました。マヤさんには妹がおりました。その頃のインドの習慣で、当時の同じ国王に結婚したそうでありまして、マヤさんが亡くなって妹さんがお釈迦様を育てあげたのであります。その妹さんである、パジャパティーという義理のお母さんは100歳で亡くなります。その時にお釈迦様はお母さんのお棺を担いだといわれるくらい、義理の母親を大切にされました。お釈迦様は35歳でお悟りになり、自分の国に帰られた際、一番先にこのお母さんが「私をお弟子にしてください。」とお釈迦様に頼みまして、一番最初に尼僧団のお坊さんになったかたが、パジャパティーでございます。また、お釈迦様にはたった1人男の子、ラーフラーという子がいました。ラーフラーはお釈迦様に、「あなたは私のお父さんですか。何かいいお土産を持ってきてくれたの。」と聞きました。するとお釈迦様は阿難に命じて、「私のお土産をやって欲しい。」と言いました。阿難はラーフラーに合掌をさせ、ラーフラーの頭を剃ってあげました。そして、ラーフラーはお釈迦様のお弟子になったのです。

ラーフラーとは非常にひどい名前でございます。古代インド語で罣礙、「邪魔」という名前です。それは、子どもを愛するものから、自分の修行の邪魔になるということで、お釈迦様は自分の息子にラーフラーと名付けたのです。しかし、お釈迦様はラーフラーを弟子としまして、最後に亡くなる時に、ラーフラーをそばに呼び、「お前は弟子としてもすばらしい弟子であった、我が子としてもすばらしい我が子であった。次の世にも私とお前は永遠の親子だ。」と言われました。お釈迦様の妻であるヤショーダは、「私もお母さんと同じように、ど

うか弟子にしてください、比丘尼にしてください。」と仏陀に頼みましたが、仏陀が、ヤショーダの懇願を叶えたのは何年もかかった後のことでありました。ですから、お釈迦様は我が母、我が妻、我が子を自分の弟子にし、一番尊い宝物をあたえたのです。

お釈迦様は何故、妻子を捨て、国民を捨て、苦行林に入ったかと申しますと、その頃インドでは梵天、仙人の思想がございました。修行して仙人になったら、この世のすべてのものが自由自在にできるという思想でありましたから、お釈迦様はこの世から老いること、病い、そして死ぬことを、修行の中でなくそうと決意したのであります。そして、6年の修行の結果、35歳の12月8日、ついにお釈迦様は悟られました。お釈迦様はこの世のすべての現象は皆、移り変わり、滅する。どれほどの努力をしても、この死は必ずあることを悟られました。お釈迦様は、それを諸行は無常であると説かれたのです。

曹洞宗をお開きになった道元禅師は、この無常というすべてが移り変わる、一時も休まないことをしっかり体得しまして、「この世の中に苦しんでいる人が1人でもいたならば、生涯私はこの修行を継続する。そして、お釈迦様の願いを自分の願いとして、多くの人々の為に生きよう。」と決心されました。道元禅師は8歳でお母さんと死に別れしておりますので、非常にお母さんを恋しがれました。ですから、道元禅師は自分自身がいつこの世を去るかということ、いつもそのことが不安でありました。お母さんの「政治家になってはいけない。お坊さんになって、この世の人々を救ってほしい。」という願いを達成するために大変なご努力をし、中国に渡り、如浄禅師の下でお悟りを開かれたのであります。「本来私たちは皆、お釈迦様のお弟子であり、仏の子である。」と悟られた道元禅師は、

すべての人が朝起きてから寝るまで、そして死ぬまで、仏が仏として生活することが、行いとして一番尊いと説かれました。ですから、道元禅師は朝起きて顔を洗うことも、歯を磨くことも、東司に行って大小の用を足すことも、すべて仏が仏の行をしている、と説きまして、『正法眼蔵』の中に『洗淨の巻』『洗面の巻』、あるいは、料理を司る『典座教訓』を書き残され、仏弟子としての1日の過ごし方を克明に示されたのです。

曹洞宗の坐禅は、本来修行せずとも自分は仏であるという慢心を離れ、仏になってやろうという思い計らいを捨て、只ひたすらに坐る修行であります。坐禅は苦行ではありません。また、痛みを我慢して超人になるものでもありません。仏法の中に自らを投入させ、すべてのこだわりや思い計らいを捨て、仏の行を徹底して行う姿に、仏の姿が現れるのであります。

しかし坐禅修行は大変時間が長く感じられるものであります。先ほど30分は坐りましたが、もう1時間は坐っているのではないかと思うほどです。早くやめてくれと思いながら坐っている私たちがいます。しかしそう思いながらも坐るところに仏の尊い姿があるのです。坐禅をすることによって、自らの命、そしてすべての命をよく見つめることができます。多くの命とともに生きている自分の命に感謝し、自分を支えてくれる多くの命に対して感謝し、優しくなる。これが坐禅の一番よいところであります。

日本で坐禅の大家といわれた澤木興道というかたがいらっしゃいました。生涯独身で生涯お寺をもたず、素晴らしい坐禅家でありましたが、その弟子に酒井得元というかたがいました。私は0歳時にポリオという病気になりまして、小学校に入るまで歩くことが出来なかったのです。こ

んなに曲がった足を、まっすぐにする手術を受けましたので、左足は小学校4年からひとつも成長しておりません。大学生の時に摂心で私が大変足が痛く、辛い思いをしておりましたら、酒井得元先生が、私に「島崎、お前は足が悪いから痛いだろ、しかしな、坐禅の大家の澤木老師も80歳の時には痛がって、坐禅が終わって帰ってきたら、痛い痛い。得元、足をさすってくれと言ったのだ。あれほどの坐禅をやっている人が、足が痛いのかとそう思ったけれども、澤木老師は、得元、80歳になってやっと分かった。80歳になったお釈迦様はこんなに痛かったのだろう。それを思うとありがたいと言ったぞ。」とこう言ってくれたのです。私は師匠が亡くなって今年で7年になります。おかげさまでこんないいことを酒井先生から聞きましたので、ガンを患い先代と同じく絶食で死にゆく師匠に言いました。「今年は死ぬのにとてもよい年です。」と言いましたら、師匠は「死ぬのにいい年なんてあるのか」と言いました。私が「1つは、先々代は79歳で亡くなりました。師匠は今80歳です。1歳父よりも長生きしたので、親孝行です。もう1つは、大聖釈迦如来は80歳でご遷化されました。」と師匠にこう言いましたら、師匠は本当に喜んで、2日後に亡くなりました。人は皆死んでいきます。悲しいことですが別れなければなりません。でも皆さん、こうして道元様の教えを聞き、坐禅をしている時に、皆様は何千年も前のお釈迦様と一体になれるのです。そして大宇宙の命と共に自分の命があることを自覚出来るのです。どうか多くの命に愛情を注ぎ、すべての生きとし生けるものの幸せを願う、そんな日常生活にご努力されますことを、日本の地から祈っております。

皆様が今、坐禅をしている。これは大宇宙と

一緒になる。その坐禅です。そして皆さんは、知らず知らずにお釈迦様と同じ心の中に、生きていられるのです。今日、目覚めた。肉体的に目が覚めただけではなく、どうか、ハッとしてこんな尊い自分の命だったのかという、喜びの目覚めであっていただきたい、というのが、このたびのお話でございます。



法話

国際シンポジウム基調講演



上田紀行

東京工業大学大学院社会理工学研究科
准教授

[これは、2011年10月4日曹洞宗檀信徒会館において開催された国際シンポジウムの基調講演の文字起こしをしたものです]

皆さんこんにちは。上田紀行です。どうぞよろしく願いいたします。

今日はこのようにすばらしい場で講演をさせていただくということで、大変楽しみにしてやって参りました。道元禅師というかたが800年以上前に蒔かれた種が、この地球上に広がって、ハワイ、北米、南米、そしてヨーロッパにという具合に、津々浦々に広がっていく。そして、海外での布教の現場で大変ご苦労されてきたかたがたが、この東京にお集まりになられて、ここでその大きな成果というものを交流なさる。そういう場でこうして基調講演をするという大きなお役をいただきましたことを大変光栄に思っておりますし、あと今日どういのお話が聞けるのかなと、私自身が大きな勉強させていただきたいと思って、ここに参った次第でございます。

まず私自身の自己紹介をしなければなりませんが、日本の仏教というものの可能性、21世紀においてどのような可能性があるのかということを追求している者でもあり、そしてそれをより力強いものにしていきたいということで活動をしている者でもあります。そういう意味では今日も21世紀における日本の仏教がいかなる方向に向かって行くのかというお話が、このシン

ポジウムの中で聞ければ大変嬉しいと思っております。ただ今日は基調講演者ではありますが、相当厳しいことも、あるいは日本の仏教の現状に対して、ただそれが今のまま進めば安閑とされている、というようなお話にはならないと思います。日本仏教のこの現状というのは、大変な崖っぷちまで追い込まれておまして、このままでは果たして、あと50年持つのか、100年持つのかというような状況になっているというくらいの危機的状況にあると私は認識しておまして、それがゆえに7年前に『がんばれ仏教！』という題の本も著した訳であります。仏教のかたが、私たち人間に対して頑張れと言ってくれるのなら話は分かるのですが、私たちの方から仏教のかたに頑張れと言わなければいけないような時代に入ってきたのではないのかという現状認識がありまして、そういう意味ではこれから大変失礼なことも申し上げるかもしれませんが、それも是非大きな心でご寛恕いただければと思います。

私自身は仏教側から世界を見ている者ではございません。文化人類学者という立場から、そして日本の中で「癒し」という言葉をこれまでずいぶんと使ってきて、その言葉をひろめた張本人なのですが、なぜこの日本社会はこれだけ豊かであるにも関わらず、我々の心がそんなにも満たされていないのか、あるいは年間3万人以上も自殺するという、自殺大国を13年間も続けていて、それをいまだに止めることが出来ません。そういった日本社会の危機の中で、仏教がどのような役割を果たすことが出来るのかという、いわば仏教の外から仏教に対して期待をしているという立場であります。今日もこれからこの講演が終わりましたら、夜の10時からテレビ番組で、3人で討論番組に出ることになって

おります。それは衛星放送のBS11という所で、3人で1時間の討論をします。そのテーマは「若者の無差別殺人」です。この頃、誰でもいいから殺したかった、と言って店に入ってガソリンをぶちまけて放火をしたり、あるいは駅で誰でもいいから殺したいと言って包丁をもって刺したりですね、あるいは皆様もご記憶にあるかもしれませんが、秋葉原の歩行者天国に車で突っ込んでいって、誰でもいいから殺したかったと言って、何人も殺してしまった若者がいます。これだけ豊かな日本においてなぜ、そのようなことが起きるのかということについて、自殺問題の専門家であり現在内閣府の参与である清水康之さんと、北九州ですとホームレスの支援を行っている、キリスト教の牧師さんである奥田知志さん、このお二人と1時間対談することになっております。

つまり、私の関心はこの日本社会がなぜこのような方向性に走ってしまっているのか。そのことの原因は何なのか。そして日本の中に7万6千ものお寺がある。最寄りの駅からここに来るまでいくつものコンビニエンスストアがありましたが、この沢山あるコンビニエンスストアの数の2倍の数のお寺が日本にはあります。しかしながら、そのお寺というものが、果たしてその持っている潜在力をちゃんと発揮しているのかどうか。このことに大きな問い、疑問を感じておまして、ですから日本の仏教が今こそ頑張ってください、そしてこの日本そして世界の状況を切り開いていく大きな原動力になってほしいと心から念願している次第です。7年前に『がんばれ仏教！』という本を書き、その直後にこちらの近くにありますが、芝の青松寺という曹洞宗のお寺で「仏教ルネッサンス塾」という塾も開催しました。まさに日本で仏教のルネ

ッサンスが求められているのではないかという主張です。そして若手の僧侶、これからの21世紀は若い僧侶のかたがたが担って行かなければならない。しかしどの仏教の宗派も、やはり日本の仏教の場合は長幼の序列が非常に厳しくて、年長者のいうことを「はい」と言って聞かなければいけない状況になっております。けれども次の世代を担って行く若手の僧侶が宗派を超えて皆で集まって、これからの仏教のあり方をディスカッションするという場のアドバイザーもしております。その場の名前は「坊主ビーアンビシャス」と言います。「ボーイズビーアンビシャス」というクラーク博士の「少年よ大志を抱け」、この言葉は大変日本人に有名であります。それを「坊主ビーアンビシャス・坊さんよ大志を抱け」というテーマで、半年に1回ずつ会議を開いていて、14回目の会議が今度の12月に青松寺で開催されることになっております。私は、仏教がどうやってその活力を取り戻して行くのか、ということを考えている訳でありまして、その意味で今日ここに全世界から様々な国境を越えた所で、仏教の布教をなさっているかたがたがお集まりになり、そしてその体験を聞かせていただくのは大きな一歩になるのではないのか、それを是非大きなこの「進一歩」、前に進む力に出来ればと思っている次第であります。

さて、自己紹介はこれくらいにしまして、この2011年の東京で、この国際シンポジウムが行われることにどのような意義があるのかということをおなりに考えてみました。今それを3つくらいにまとめて申し上げておきます。それは一つにはこの世界のグローバル化ということがこの十数年言われております。ますます世界の各地が近くなっていく、そしてそこでグローバル化の波の中で深く結び合っていくと

ということですね。その中で様々な世界の部分に中心があるのだという考え方が広がっています。たとえばこの曹洞宗にしてもこの日本に中心があって、あるいはここは会社でいえば本店のようなもので、世界各地に支店がある。そして曹洞宗の教えというものがここに確固とした「正しい教え」があって、それを世界各地、色々な所にばらまいていくような考えがかつてはあったと思います。しかしながら、このグローバル化の中で、実はここに中心があってそれをどこかに配給しているのではなくて、まさに世界の拠点一つ一つの所に中心があり、むしろそこでの体験から我々東京にいる、このあたかも中心にいると思われている我々が学ぶことが多いのではないのか、そのようにグローバル化した社会の中で頭を切り換えて行くべきではないか、それが我々日本人、日本仏教のためになるのではないのかということがまず第一点です。

第二点としましては、これは第一点の中に含まれておりますが、世界の中での様々な仏教の展開、あるいはこの曹洞禅の海外における展開から我々日本人は何を学ぶことが出来るのか。それが第二点であります。

第三点は、まさに先ほど宗務総長もおっしゃっていましたが、あるいは皆さんもおっしゃっていますが、東日本大震災のことです。3.11、このことから半年ちょっと経った今、ここでこの「進一歩」ということを考える意味はどこにあるのかということをございます。私は震災後3ヶ月経ちました所で、もうこのままではいけないと思ひまして、『慈悲の怒り・震災後を生きる心のマネジメント』というこの本を緊急出版させていただきました。この震災が抱えてるもの、あるいは原発事故が何故起きてしまった

のかという、このことが抱えている意味というものは、この日本社会にとって限りなく大きな意味があると思います。しかしながら、この大きな意味がこのままでは見過ごされたままで、このまま復興していくというような風潮がある中ですね、私はこの「慈悲」という仏教用語を使って、それも慈悲からの怒りというテーマでこの本を書かせていただきました。まさにこの震災、あるいは、この原発事故は日本社会の非常に弱い点を突いたというふうに思っておりますので、そこからの「進歩」という中で、まさに今日のこのシンポジウムの中でどういう意味があるのかということと同時に考えていきたいというふうに思っております。ということで、これから残りの時間、その点についてお話しさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、まず第一点でありますけれども、そのグローバル化ということでもあります。グローバルズムということがこの十数年来言われてまいりました。これには大きく分けて良い点と悪い点がございまして。ひとつはこれを資本主義という意味から考えてみますと、このグローバル資本主義というのは、日本の色々なかたがたが批判していますけれども、アメリカ的な、非常に表層的な、お金が儲かればいいんだという、資本主義のシステム。あるいは、そういう観点から評価をしていくというシステムが、世界中津々浦々まで、それがITといったようなものを通じてばらまかれていく。そうするとそのアメリカ的な資本主義的なあり方というものが世界を覆ってしまうということで、このグローバル資本主義というのは一元化なのではないかと批判する人もいます。しかしながらもう一方では、世界各地にある文化的なもの、あるいはその民

族的なものというものが、ヨーロッパが中心であるとかあるいはどこが中心であるとかではなくて、そこから独自の発信をするということが可能になった。そういう意味では、文化的にはある意味では多極化、多様化というものを促しているということが出来るのではないのでしょうか。仏教というものを考えてみますと、これは一元的な宗教なのか、あるいは多元的な宗教ということなのかということをも根本的に考える必要がございます。たとえばバチカンに中心があって、そしてそこで「これが正しいキリスト教」、「間違っている異端のキリスト教」が毎年決められ、そしてその正しいキリスト教だけが世界に広がっていくというような、一元化されたイメージを仏教に当てはめることができるのだろうかということを考えてみますと、私はこの仏教というものは、そもそも多様化というものをその中に内包しているのではないのかというふうに思われるのです。つまり、仏教の中には縁起という考え方がその中核にあります。そして、その関係性の中において、そのものが存在しているのであって、本質的に何かひとつ正しいものが存在するのではないという、その教えでありますけれども、この仏教を考えてみましても、お釈迦様の言ったことだけが正しいんだということになってしまえば、私たちのこの国際大会はですね、全員がインドに行ってそして「お釈迦様万歳」と言わなければいけないこととなります。しかしながら、その仏陀、釈迦牟尼というかたが亡くなってから、それが上座部仏教と大乘仏教というような、まさにその関係性の中で分裂していきます。そしてそれが北伝していく、北の方に伝わっていく、そしてまた南の方にも伝わっていく、そして私たちのこの日本仏教というものは、北の方を伝わっていった中国仏教のほうから日本に入ってくるということに

なりますよね。で、日本仏教は邪道ではないのかという研究もありまして、駒澤大学の先生の中には、日本仏教は間違っただけなんだというふうなかたもいらっしやる。しかし私は、上座部仏教であっても、あるいはチベット仏教であっても、中国の仏教であっても、日本の仏教であっても、それは一つ一つがその縁起の中で、そしてその時代性の中で、その地域性の中でまさに花開いた一つ一つがどれも中心なのだと考えなくてはならないのだというふうに思われる訳です。たとえばこの曹洞宗、いまここが中心であるというふうに思って果たしていいのかどうか。例えば祖先をさかのぼっていくということになりますと、道元禅師は中国に渡って、そしてそこで中国の曹洞宗に学んでこの曹洞宗を開かれた訳ですから、皆さん早く中国に行って大会を開かなければならないということになります。しかしながら、そう考えてみますと、ここに中心がある。この芝公園でやってることに中心がある。だけれども、じゃあそのかたがた、ハワイに行った、北米に行った、南米に行った、ヨーロッパに行ったというかたがたは支店であって、ここが中心でそのかたがたが支店に行ったという考え方を我々がとりますと、我々は中国に行って曹洞宗の起源を辿らなければいけなくなり、そしてさらにはインドに行ってすべてお釈迦様が一番正しいんだ、私たち全員がその支店なんだという考え方にならなければいけない。しかし、そうなのではなくて、その仏教の歴史というのはよくよく考えてみますと、そこで分派をしていったように見えるんだけど、そうではなくて、その一つ一つが独自の花を咲かせているというふうに考えなくてはならないのではないかなと思います。

さて、この曹洞禅というものも、世界に飛躍

してもう何十年、もう百年近いというお話がありましたけれども、そうなるにせよ、その海外での体験というものもですね、大きな成果があり、そのことは学ぶべき一つの花、あるいは沢山の花としてここにいる日本の仏教者も考えなければならぬのではないかな。日本仏教が世界に広がって良かったなというような、これまでの考え方からですね、世界に広がってそしてそこで編集された作業を経て、そしてそこで様々な可能性によってトライ・アンド・エラーというものが試された、まさにその体験をこそ、我々日本人が学ぶべき時にきているのではないかなというふうに発想を逆転させなければいけない状況になっているのではないかな。これを最初に申し上げたいと思いますし、そのことのために、ある意味今日のシンポジウムが開かれていると思いますし、そして主催者の予測を遙かに上回るかたがたがここにつめかけてらっしやる。こんなお忙しいときに、こんな平日にこれだけのかたが来られているというのは、まさに、その海外での体験というものがどのようなものなのか、それが我々の仏教の可能性をどのように開いていくのかということに対しての強い思いがおありになるので、これだけ沢山のかたがお集まりになったのだと思います。これが第一点であります。

第二点として、日本仏教がいかに危機に瀕しているかという、ここにいらっしやる僧侶のかたにとっては相当耳の痛いお話しをしなければいけません。日本仏教はこれまで一般にはですね、「葬式仏教」というふうに大変揶揄されてきた、批判されてきた訳です。ところが、その葬式すら段々できなくなってきているという。葬式仏教から葬式をとってしまったら、仏教は残るんですけど、そこで、葬式仏教から葬式を

とっちゃうと、果たして何が残るのかというような時代に立ち至っております。あともう一つは、僧侶のかたがたがこの社会の中で果たして、そんなに尊敬を勝ち得ているのかどうなのか、あるいはお寺という存在が、この社会の中でかけがえのないすばらしい場だなというふうに思われてるのかという、そのことをちょっと考えてみなければなりません。私はいろんなところで沢山の講演をいたしますけれども、そこでこの2年間くらいちょっと怖い質問を聴衆のかたにしております。それは多くは仏教関係の講演なんです、最初にその質問をしたのは、京都の立命館大学でのセミナーでした。「皆さんの中でこの言葉に対してよいイメージを持っているひとは手を挙げてください」、ということでは手を挙げていただくんですね。ここでちょっとやってみてもいいかもしれませんけれども。ちょっとやってみましょうか。私がしゃべるこの言葉に対して良いイメージを持ってるかたは手を挙げてください。ということで、いまから4つの言葉を申し上げます。最初は「仏教」です。仏教に対して良いイメージを持っているかたはちょっと手を挙げていただけますか。はい。もうほとんど100パーセントのかたが手を挙げます。では二番目です。「日本仏教」です。日本の仏教に対して良いイメージを持っておられるかたはどうでしょうか。手をお挙げください。このシンポジウムにして、相当減ってきましたね。三番目です。「日本のお寺」です。日本のお寺に対して良いイメージをお持ちのかたはどれくらいいらっしゃいますか。ではどうぞ。はい。大変正直なかたが多いようです。四番目。「日本のお坊さん」僧侶に対してです。はい、では日本のお坊さんに対して良いイメージを持っているかたどうぞ。ありがとうございます。今まで私が聞いた講演の中では、最もお

坊さんに対する信頼が高い場でした。立命館大学での講演、そしてそのあと東京での高野山大学での一般のパブリックなレクチャー。その後、浄土真宗の札幌での講演会。あと昨日も、広島のお田舎の過疎地帯のそれも浄土真宗での、集まりの中でもそれを聞きました。大体一般の日本人がどのように手を挙げるかといいますと、「仏教」は95パーセント位のかたが良いイメージを持つかたに手を挙げます。「日本仏教」になると60パーセント位に減少します。そして「日本のお寺」になりますと大体、25パーセント位に減ってまいります。そして「僧侶」。「日本のお坊さん」になりますと、最初の立命館大学では10パーセントあったんですけども、その後の高野山大学とかあるいは、浄土真宗の一般の所では大体、5パーセント位。つまり、仏教のことは好きなんです。ところがお寺は嫌いなんです。あるいは日本人の僧侶のあり方に関しては非常に厳しい見方を持たれているということが言えます。このことをどういうふうに考えるのかということでもありますね。

で、これを聞くとですね、特に若手の僧侶の研修会で話をさせていただくことがあるんですが、この頃の若手僧侶は非常に傷つきやすい人が多いので、もうペシャーンとなってしまいます。だけど私はその若手僧侶たちに言うんですね。今がチャンスなんだと。例えば仏教の話で経済の話をするのは不謹慎ですが、会社の株があるとしましょう。その会社はものすごく世間から期待されているんだけど、株価がものすごく低迷している。人々は期待しているけれども、株価が安い会社の株は今、買い時なのか売り時なのかと言え、買うときです。今買って皆さんの期待に添うようなことができれば、どんどん株が上がっていくわけです。ですからいまこ

これは今チャンスだと思わなければいけない、というのが第一点ですね。

あともう一つは、今の若手僧侶達は年長者の偉い僧侶、お父さん、お母さんとか偉い僧侶に対して従順な人が多いです。前の世代のかたがもうちょっと反抗的でした。今の世代のかたが「良い子」が多いんですね。だけど彼らに言うのは、お父さんの世代、お母さんの世代、その先生達の世代の中で、どんどん僧侶に対する評価が下がってきたのだとすれば、その先生のことをただ盲目的に聞いて「良い子」をやり続けていても、評価は回復しないということです。自分たちの世代で何か新しいもの、まさにこの「進歩」、新しい何かを進めていく試みをしなければ、ただ先生がこう言っていました。僕のお父さんはこう言っていましたということ。を鵜呑みにして、とても出来の良い子を演じていても、仏教のこの現実是不変なものではないのかということですね。その中でどういうことを考えていったらいいのか。そして、特に若い人たちの中でのこの仏教のプレゼンスというのは非常に下がっております。この若い次の世代の人たちに仏教の精神あるいは仏教のすばらしさを広めたりするのはどうしたらいいのか。その時に私はよく言うんですけども、年長の非常に年かさの僧侶のかたがたのところでは私が講習会をやるとします。そうすると皆さんが、「いやーこの頃の若い者は全く分かりませんな。もうお仏壇を見ても手が合うこともないし、仏様と言っても尊いという感覚はないし」ということですね。で、「どうやって布教したらいいんだか分からない」というふうに皆様おっしゃるんです。その時に私はその偉い先生がたにはこう言います。「早く引退してください。そして若手の僧侶に早く任せてください」と。つまり、もう今の若者たちは、その偉い先生たちにとっ

ては外国人みたいなものなんです。外国人に布教しているようなものなんです。昔の日本人とは違うんです。となれば、ここで逆に全世界から集まってきた、外国人に布教しているかたがたの経験から、むしろ学ぶべきではないのかと。外国の、全く仏教的な素地がない、あるいは日系コミュニティにおいても、3世・4世となつてほとんどその日本の仏教のお仏壇がどうこうとか、そういうことの中なかで仏教を信仰しているのではない人に仏教を説く。あるいは、まさに最初から日本人ではないかたがた、だけれども禅センターに集まって、禅というものに惹かれ、曹洞禅というものに惹かれ、仏教の精神の惹かれているというかたがたに、外国人に布教をしているかたがたに、いかに布教なさっているかということを知るといことは、まさに日本人だけれども、もはや外国人としか思えないような若者達にどのように仏教を広めていくかという時に、必ずや大きな参考になるのではないかというふうに思っております。

このことを考えたのは、先ほどもご紹介にありましたように、まさに私がアメリカのカリフォルニアにあるスタンフォード大学で教えていた、短い期間ではありますが、教えていたときの大きなショックといいますか、大きな驚きが背景にあります。アメリカのカリフォルニアでは禅センターに通ってきている人が多いということですね。これはちょっと回想的になりますが、非常にインテリのちょっとお金持ちみたいなかたがたのなかに禅センターに通っているかたが非常に多かったですね。そして、そのかたがたの仏教に対する知識が半端ではなくて、ほとんどの日本人よりも仏教に対する知識がある。私、恥ずかしながら東京工業大学という、インスティテュート・オブ・テクノロジー、その前

にマサチューセッツがつけば、MITですが、日本の中でトップ中のトップの大学で教えていますが、学生に仏教ってなんなのって聞いても多分95パーセントの学生は何にも答えられないと思います。「仏教とはお仏壇の前で線香を立てる宗教ではないでしょうか」それくらいの知識です。じゃあお釈迦様は何を言ったのかっていても、それは「悟りですね」という。でも悟りは何ですか。「何か難しくてありがたいものです」はい終わり。もうこれ以上の知識はほとんどないと思います。しかしながら、外国に行くとそのスタンフォードで教えていると、その理科系の学生の中でもものすごい興味を持っている子がいて、そしてちゃんとお釈迦様が何を言っていたのかも本を読んで知っていて、そしてそこでの悟りがなんなのかということもしっかり学んでいてですね、これは日本人よりもカリフォルニアにいる仏教に興味のある人のほうがよっぽど仏教のことを知っているのではないか、ということが非常に私が驚いたことでした。

あと、もうひとつ驚いたことはですね、アメリカで沢山の禅センターで、女性の僧侶のかたがたが本当に大きな活躍をしているのを見ました。これは日本ではあんまり見られない。日本の仏教の講演会に行くとはですね、もう私なんかおっさんばかり並んでいるので、それだけで非常にディスカレッジというか、また今日もおっさんに話をするのかという、つまり仏教は男のものだっていうことが何か前提とされているんですね。そこに何かフェミニンな女性的な感性というものが取り込まれるということがあんまりないわけなんです。男性僧侶のかたが偉くて、女性はそもそも僧侶もそんなに多くないし、あとほとんどお寺の中では大黒さんや坊守さんという形でいかに男性の僧侶をいかに支えて、

縁の下の力持ちになり、そのヘルプをするという立場に追いやられているように見えます。しかし、私がアメリカで見たのは女性僧侶のかたがたが大きな役割を果たして、そして男性僧侶とほとんど同じ視点で活動をなさっているということですね。このことにものすごく大きな感銘を受けました。そしてこの日本社会の中でどうしてもっと女性が僧侶として活躍していかないのかと、やはり女性には女性のすばらしい点があり、それをあい補って行くのが重要なのに、何故日本はこのような男性優位主義なのかということも考えていかなくてはならないと思います。

あと一番大きく私が衝撃を受けましたのは、アメリカでの仏教徒のかたと我々日本人の仏教徒のかたがたは、反対方向の指向性を持っていることです。日本の私たちにとりましては仏教というのは、「家の宗教」です。私もこの上田家は浄土真宗大谷派というお寺を菩提寺として持っていますので、そこからお坊さんがきて、私も一応浄土真宗の大谷派の門徒ということに自動的になるわけですね。そこで私が何を選ぶというような、そのオプションは自分がない。つまり、日本人にとっての仏教というのはより共同体みたいなもの、そして家の宗教というふうに規定されております。ところが、アメリカで出会ったたくさんの仏教徒のかたがたは元はキリスト教であったりする。そしてそのキリスト教もカリフォルニアあたりではちょっとゆるいかもしれませんが、選挙をしたときにブッシュさんが勝つような州、中西部であったりとか、南部であったりする所のキリスト教は非常に共同体的で、例えば週末に教会に行かないというような人は、あなたは果たして人間なのか。そこまでひどくはないとは思いますが、お笑いになるくらいそういうようなものになるわけで、

その教会に週末に行かないなんてことは、もうほとんどそのコミュニティーの一員としての見識が疑われる、だからあなた、本当にこの社会の一員なの？ くらいのある種のレッテルが貼られるくらいです。つまり、そういった共同体的なキリスト教というようなものに対して、私個人のスピリチュアリティとか、あるいは私個人の人間としての生き方を追求したいというかたがたが多くその仏教というものに惹かれています、ということを見つけたんですね。これはまったく日本とは逆方向の考え方だということができます。例えば日本のキリスト者というものを考えてきた時に、家制度というものにがんじがらめになり、そして家制度というものがこの日本の大きな社会の流れ、個人というものの封殺していく、殺していくようなその流れに対抗する、という非常に個人的なモチベーションを持った人が多くキリスト教に改心をなさっています。そういう意味でいいますと、同じ仏教とか同じキリスト教というふうにいっていますが、アメリカのキリスト教徒、それも非常に保守的な所にいらっしゃるキリスト教徒のほうが日本の仏教徒に近くて、そしてカリフォルニアあたりで、そういうものには反旗を翻して、自分個人のスピリチュアリティというものを追求したいということで禅センターに行っちゃるかたがたは、日本の中でキリスト教に改宗するというかたがたにむしろ近いのかもしれない。私はこのことを考え、そしてそのことを非常に新鮮に思った訳なんですね。と言いますのも、日本では今、家の宗教が崩壊してきております。あなたは上田家なんだから、この親鸞さんの教えを信じなければいけませんよ。これは大学の必修授業のようなものですね。ここに入ったのだからあなたはこれを学ばなくてはならない。でも私たちの今、個性化された日本においては、

私とは一体なんなんだろう、あるいは私はどのような者に支えられ、何を目指しているのかそして、どこからきてどこに行くのかという、個人化された、個性化された救いであるとか、そのようなレベルが求められているわけです。となりますとそこで果たして家の宗教というものにのっとった仏教がその答えを与えられるのかということでもあります。

また、僧侶のかたがたを考えてみましても、私、たくさんの僧侶研修会で「あなたが僧侶になったモチベーションは？」というふうに聞きますと、それは家を継ぐためですから、とこういいう答えが返ってまいります。これ日本人は誰もべつに驚かない、これを聞いても。海外でそれを聞くと驚きます。つまり僧侶と住職は違う言葉で、住職というのはお寺の住職という職業の名前です。僧侶というのはこの仏の道そのものに帰依していくという、三宝に帰依し、そしてそのことをまさに自分の生きることの中核に据えて行く、まさに宗教的なレベルのことを言っている訳ですよ。ですから僧侶になることが最初で、それからその人が住職になるというのならその段階は分かるんだけど、住職にならなければいけないので僧侶になるという人が非常に多いわけで。それは、実は人間の心としては逆な訳ですよ。しかし、その逆なことが日本では標準化されている。しかし、そのことと、先ほどの日本の僧侶には10パーセントしか良いイメージを持っていないというまさにそのことに関わっているのではないのか。この人は本当に仏教を信じているのかなど。私は日本のいろいろな講習会で日本の僧侶の一番の問題は仏教を信じていないのではないか、ということをよく言います。つまり自分の人生で、仏教が一切皆苦、すべてが苦しみから始まるというような教えであるとすれば、自分の人生で解決できな

い苦しみということに出会って、そしてその苦しみをどうにかしたいという切羽詰まった所で、お釈迦様の教えに出会って、ああすばらしいものに出会った、これがまさにご縁であり縁起でもあると思うのですが、その中でこそ初めて教えが生きてくるのですが、多くの僧侶のかたがたにあなたは、どういう苦しみを経てきたんですかという、「いや、お父さんの後を継がなければいけないという苦しみが一番の自分の人生の苦しみで」という。その苦しみに関してはそのかたがたの仏法は有効だとは思いますが、しかし、例えばこの日本社会の中で誰でもいいから殺したいとか、自分はちっぽけな人間であるとか、自分はここに生きていてもしょうがないんだと言った虚無感に浸たされているその若者たちに対して、その住職になりたいという程度の発心で勉強をなさったかたがたの教えというのがどの程度届くのかということは非常に疑問に思わざるをえません。ちょっとここまで相当きついこと言いましたので、ここで可能性のあることも言っておかないと暗殺されちゃうんじゃないかと思えますけど。しかし、このことはやはり言っておかなければいけないと思えます。

さて、この「進歩」ということを考えますときに、そうしますと私はこのようなことを考えます。つまり、これからの仏教において、その二つの軸。一番目には個人のスピリチュアリティの追求あるいは、個人化された私というものがどのように生きていくかという個人化されたレベルがあります。もう一つは、一方でこの仏教がどのようにコミュニティー、あるいはこの共同体というものを支えていくのかという、より社会的なものがござります。日本の仏教というのは今まで申し上げてきたように、より社会的なコミュニティーを維持するという中に組

み込まれた宗教だったと言えるでしょう。そして私が海外に行って驚いたことは、その仏教は個人のスピリチュアリティという次元のものを解決する。あるいはなにかそのことに対してインパクトを与えるというものだと理解されていたという。この二つの大きな方向性の違いに私はびっくりしたわけです。

しかしながらその両面において、その「進歩」というものが成し遂げられていかなければ、本来の意味での一歩というものは踏み出せないのではないのか。その時に私はここで申し上げておきたいのが、私は共同体も非常に重要だと思っております。共同体の再構築も非常に重要です。日本社会の中でこの頃はやっている言葉に「無縁社会」という言葉があります。つまりどんな縁も無くお年寄りたちが、孤独の中で死んでいく、見捨てられていく。そしてこれはお年寄りだけに限らず、若者たちもそう思っているのです。ですから秋葉原に突っ込んであんな殺人事件を犯してしまう。これは興味深いことなのですが、お年寄りの場合、物理的に孤独になって死ぬ。それが無縁です。しかし、若者たちの場合は学校にも行っています。人にはたくさん会っています。しかし、ここにも今日200人位のかたがいらっしゃると思えますが、こんなにたくさん人がいるのに誰も僕のことを分かってくれない。つまり「群衆の中の孤独」ですね。これだけ人がいるのに誰も僕のことなんて分かってくれないし、僕が生きようが死のうが別にこの世界には関係がないんだと思ってしまいう大量の若者を、この日本の社会は生み出し続けている。こういうことなんですね。そういう中でもう一回、絆というものを再生していくにはどうしたらいいのかということですね。その中で、私はコミュニティーがもう一回再生していくということが重要だと思うのですが、今までの

日本的なコミュニティーというものを、そのまま再生してもあんまり意味がない、それどころかかなり害毒があるのではないのかということです。

ちょっと時間が無くなってきたので端折らなければいけません、例えば原発事故から半年が経ってしまった。その半年のところでこのことを問うのはどういう意味があるのかと考えた時に、この原発事故、これはある意味で日本の共同性というものの弱さが非常にはっきりと出た事故なのではないかと私は考えております。私は別の本で、今の日本は「第三の敗戦」に瀕しているということを書いたことがあります。

「第一の敗戦」が第二次世界大戦の軍事的な敗戦です。そしてその後に経済的には日本はもう大変な勝利を収めて「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われてみんなが喜び勇んでいたのですが、1990年代の初頭にバブルが崩壊することで経済的な敗戦を体験します。これが「第二の敗戦」。そして「第三の敗戦」。それは2005年位に起こったと思っておりますが、それは信頼とか安心の敗戦だというふうに考えております。例えば、その頃に小泉首相が「すべての人間は使い捨てだ」というような発言をしました。「国会議員も使い捨てだ」という発言をしました。人間がディスポーザブルである、物が使い捨てだというのも非常に良くないことですが、人間が使い捨てだなんて言葉がはやってきた。そして私はそれに頭にきたので、私の教えている東京工業大学で200人位の20歳の学生に、「ではみなさん、人間は使い捨てだと思う人。はい手を挙げてください」と言ったら、半分が手を挙げちゃいました。人間が使い捨てなんだと思う人が半分です。私は本当にショックを受けました。そんな考え方をしている人たちが次の子どもを産んだ時に、「太郎生まれてきて本当に嬉しいよ。だけどお前は使い捨てとして

生まれてきたんだからな」なんて言うんでしょうか。これはこの国として相当の危機的状況になっている、もう敗戦を迎えていると言ってもいいんじゃないかというくらいの私は衝撃を受けました。実はもっと衝撃を受けたことがありまして、それはその後でお坊さんの会に行つてその話をしますと、お坊さんたちはみんな、「そんな若者に仏教を布教しないといけない我々の大変さが先生にも分かってもらえますか」と、いつの間にかお坊さんたちが被害者になっていることです。私たち大人がどのような姿を見せて来たか、そのことを子どもたちは見ていて、その結果人間が使い捨てになっていると思ったにも関わらず、このまさに「人間は使い捨てではないのだ」ということを言わなきゃいけない私たち、教育者の私もそうです。あるいはお坊さんがたもそうです。そのかたがたが自分の姿というものがそれを、見せているのだと反省せずに、いつの間にか「私たちは大変なんですよ、そんな若者に布教しなきゃならないんだから」と被害者になっているとは、これいかに。だから、これこそが原因なのではないかと思ったのでありますが、その日本の共同性を生み出しているもの、そしてその原発事故を引き起こしている原因が、実は第一の敗戦の原因と似ているのではないかということはこの『慈悲の怒り』という本の中に書きました。

例えば、第二次世界大戦でアメリカと開戦をすれば、圧倒的な国力の違いがありますので、必ず負けるということは、その政府の上層部の人たちは皆分かっていたのです。だけれども何故か戦争に突っ込んでしまつて、そのことについて戦後の東京裁判の中で、A級戦犯とされる大臣の人たちが証言を求められています。例えば、これは丸山真男の本の中に書いてあるんですけども、木戸幸一元内大臣に日独伊三国軍事

同盟に賛否の態度を問います。そうするとこの内大臣は「私個人としてはこの同盟に反対でありました」と答えました。東郷茂徳元外相、東郷ファミリーという外交官の物凄いファミリーがあって、このかたのお孫さんも後に外務省の高官になったと思いますが、「私の個人的意見では反対ではありましたが、すべて物事に成り行きがあります、すなわち前に決まった政策がいったん既成事実になった以上は、これを変えることははなはだ簡単ではありません。」しかし、この東郷外相は「絶対軍事同盟を結ばなくてはならない。ドイツのヒットラーやムッソリーニと結ばなくてはならない」と名演説を国会でやっているんですね。そのことを聞かれると「この際個人的な感情を公の演説に含ませる余地はなかった訳であります。私は当時の日本の外務大臣として、こういうことを言うべく、言わなきゃならない地位にあったことを申し上げたかたが最も正確だと思います」と言っています。それから小磯国昭元首相、今度はプライムミニスターだからトップです。トップはこんなことを言います。「我々日本人の生き方として、自分の意見は意見、議論は議論といたしまして、国策がいやしくも決定せられました以上、我々はその国策に従って努力するというのが、我々に課せられた従来の慣習であり、また尊重せらるる生き方であります」

こういう言い方を聞いて外国の裁判官たちは驚いてしまいます。どこに責任があるんだこの国は。首相が、私は戦争やりたくなかったんですけど、でも首相になったら私の意見は言えませんので。だから私に責任はないんです。こんなことを堂々と言ってしまふ日本という国は一体どうなってるんだということですよ。ところで、このことをよくよく考えてみますと、70年後に何故原発事故が起こったのか。福島第

一原発はあれだけ危険だと国会でも答弁がされていたし、多くの人たちが指摘をしていました。津波が来ればもうアウトなんだ。しかしながら「ここは安全なんだ」という神話が支配し、そしてその空気が一度定まってしまうと、それに対して危険だということが言えないのです。ここが危険だからここを直しましょうと言っちゃおうと、原発の安全神話を否定することになるので、じゃあここは今まで安全だったのに、やっぱり危険な所があったんですかというふうに言われちゃうので、それが言えない。それでその空気に従って、反対意見は皆が自己抑制をしていったら、原発事故が発生したということです。この日本の社会が持つ空気の大きさ、いわゆる世間、この人からどういうふうに評価をされるのか、と言ったような世間。人間の個人的な考えの表出というものを非常に阻害させるような、日本の世間のあり方を一步超えて行く、そういう共同体が構築されない限り、本当の「進歩」には全然ならない。それどころか、ずるずると進歩の反対はなんなでしょうね、「後歩」後退するようなものにしかならないのではないかと思います。

その時に私が考えますが、この日本の仏教界の世間のあり方です。一般の人々よりも世間に弱いのがお寺さんの世間だと私は思っております。周りのお寺さんからどんなことを言われるか、宗門からどのようなことを言われるかとか、あるいは自分の先生やお父さんからどのように言われるかとか、そういうことでもう日本の空気が決まってしまう。あるいは他のかたからどう評価されるのかということですね。それを異常に気にして一步を踏み出していない。結局のところはこの世界にとって何がいいのかということよりも、私が周りの人からどう評価されるか、あるいは変な人だと思われたいとい

う、そのことを無条件に選択していくという、このことをやはり変えていかなければならないということですね。

皆さんよくご存知の『スッタニパータ』にある「犀の角のようにただ一人歩め」という有名な言葉がございます。犀の角のような、一本の角。つまりは世間にどう思われるかということではなくて、もうまっすぐにその真理というものを探求していくべきである。これは道元禅師も似たようなことをおっしゃっていると思います。お坊さんは周りの評価等を非常に気にしているんだけれども、本当にその真実というものを求めてしっかりと歩いていくのだ、ということは何回も何回もおっしゃっているように私には見えます。今そのことが果たしてどうなのか。よく私、冗談にもならない冗談ですけど、日本の仏教界に原発をまかしておけば30年前にもうすでに爆発していたのではないかと、いうちょっとブラックユーモアになってしまいますが、それくらいのことを仏教界の人には言いたいと思います。

しかしながら、個だけが確立すればいいのかということではない。私は海外の坐禅とかをなさっているかたがたを見て、ちょっと不思議に思ったことがあります。それはですね、あんまり他の人との絆ということを考えていなくて、その瞑想というものはあたかも心身鍛錬法というか、あるいは自分の人生の中の何か自分の中の心身の調和であるとか、個人的な次元の自己実現に関わるものと思われる節があるんですね。だから瞑想をやって何か脳の能力を開発して、そしてその中で悟りの境地を自分が開いて、そこでじゃあ自分は進んで行きましょうと。でも、そこで隣にいるお友達はどうなるのか。あるいはアメリカの社会の

中では物凄い格差があるわけで、その格差社会。そこで苦しんでいる人がいて、そして仏教は知恵と慈悲が二つの大きな柱ですから、知恵そして慈悲、でもこの人の慈悲はどこにいったのかと。自分だけ瞑想をやって気持ちよくなって、悟りを開いてああよかったなと。これで自分はストレスフリーになりましたと。よかったなと。このような感じの人が時々いらっしゃる。すべてのかたがたではないですけど。そういう時に個人化された宗教は逆に言えばどのようにそのコミュニティーを築いていけるのかなと、このことも非常に気になった所でございます。

さて、その時に日本仏教の失地回復という部分を申し上げます。というのも、日本仏教は葬式仏教だというふうにずいぶんと揶揄されてまいりました。しかしながら、今回の東日本大震災、この東日本大震災が起こった東北の地というのは曹洞宗のお寺がたいへん多かった所でございます。そこで自分の肉親を失い、若い子どもたちも津波に流され、親も流れ、みんなも流されてしまった時に、皆さん何を望んだかと言えば、やはりお葬式をだ出してあげたい。亡くなったかたのためにまず葬儀を執り行いたいという、このことがまず第一だったのですね。そして、小さな集落に根付いているお寺では、外からの助けが来なくても、あるいは食糧がなくてもお寺を中心にみんなが助け合って、そしてお寺の本堂に寝て、一週間も二週間も外からの援助が来なくても耐えてきたという集落がいくつもあるわけです。日本の仏教は葬式仏教であると言われ、そこに思想とか哲学とかあんまりなくて、習慣としてやっているだけではないかと批判されている所があります。しかし一方でお寺を巡るそのコミュニティーのあり方というものが、その社会が危機に瀕した時に、どれ

だけ大きな力になるかということも、この東日本大震災において成果を見せたのではないでしょう。

さて、時間が無くなってきたので最後に結論をいくつか申し上げなくてはなりません。私はこの「進歩」のきっかけがどこにあるのかと言えば、それはやはり仏教のお釈迦様の最初の悟りであった、縁起というものが如何に生きられるかというふうに考えております。つまりその縁起がある意味では教義として説かれるのではなくて、それを本当にどのように生きるのかってことですね。日本のお坊さんたちは縁起は「説く」んですけれど、あんまり縁起を「生きない」かたが多い。あるいは慈悲は「説く」んですけれど慈悲を「生きない」かたが多い。みんなに慈悲は説くんですけれど、ここで誰か死にそうになっても助けないという。あるいは他のかたがたに布施行は説くんですけれど、お寺さん自身は他の人に布施をあんまりしません。そのことをほとんどの人は見ています。だけれども、もう一回そこを切り開いて行くべきだ。

そして日本仏教が縁起に対して非常に想像力を欠如させていくのは、自分自身がどのような縁起で僧侶になったのかという想像力が非常に乏しいからだと思います。例えば、私はここに立っていますけれども、東京工業大学で宗教学をやっている先生が立っていると、お役としてはそういうふうに見えるかもしれませんが。しかしながら、私が2歳半の時に父親が失踪して、母一人、子一人で育てられ、そして母と一緒に非常に頑張って生きてきたのだけれども、思春期になってしまってその母と二人で生きていくことがどうにも耐えられなくなって、お前と別れるためなら外で一人か二人刺し殺したいと言ってしまって、そして家の中がむちゃくちゃにな

り、私はカウンセラーに通うようになり、そして母は「あなたが出て行かないなら、私が出て行くわよ」と言ってニューヨークのマンハッタンに移住しちゃって、そして家族が解散した。その後私はますます精神がおかしくなり、カウンセラーに通ったり、インドをはじめとして世界を放浪旅行したりする中から、癒しの世界や仏教に出会って、ここでみなさんの前に立っております。ということは、私が2歳半の時に私たち家族を置いて失踪した父というのは、今はいませんけれども、講演させていただいている私のここの傍らに立っているわけです。自分がいなくなったという、この家族を捨てたという意味でこの父親はここに立っていて、その父親のご縁が、そしてその後の母親との深い葛藤が私をこうして皆さんに会わせてくれているというようなことも考えられますね。ということは、私が皆さんと会っているこの一瞬の中にも、ただ私は大学の教授としてその知識をみなさんに伝えているという訳ではなくて、数限りない人間の苦しみであったり悲しみであったり、あるいは喜びであったりというようなものがこの瞬間に私たちの関係を結んでいるという想像力が必要で、そしてまさに仏教というのはそうした想像力に開かれていく。だからこそ、その縁起という知恵があるからこそ、その想像力の中で慈悲という行いをおこなえるというふうに私は思うのです。

しかしながら、通常のご住職のように、そこで固定化された私がお寺を継ぐからこのお説教をしているんですよ、そして目の前には固定化された檀家さんという聴衆たちがいて、私は寺を継いで檀家さんに話をしているという、ある意味で想像力が固定化された関係性の中では、本当にこの社会の中で色々なものを抱え、そしていろんなご縁の中でもう死にたいと思っ

ていたりとか、追いつめられている人の苦しみというものにまで、そこを補足していく想像力というものが、果たして育っていくのだろうか。私はこのことを大いに心配している訳です。そしてその時に申し上げますと、仏教が果たして縁起というものを体現していくかという時に、私は仏教が境界を超えて行くということが重要だと思えます。この日本の仏教界の中でお寺というシステムがあって、それが世襲になっていて、そしてその狭い社会の中でただそのことをやっていく。それは日本の世間の中では親孝行だね、と言ってほめられることだと思えます。しかしながら、決められた境界を超えて行く。そのボーダーを超えていくというところに実は仏教の本質があるのではないか。例えば、道元禅師にしましても最後に説かれたその教えだけを見ていけば、ただここに坐るということだけがあるのかもしれない。しかしながら、この道元というかたが比叡山に入って、そして比叡山に失望して途中で下りてしまう。そして何人もの先生と出会おうとして、出会うんだけれどもその先生と一緒に中国にまで行く。そして中国に行ったらたくさんの先生がたの門を叩いているうちに、一緒に行った先生は亡くなってしまって、孤立無援になり、しかしそれでもくじけず、ボーダーを超えながら、まさに真理を追求しようとした時に、最後にこの曹洞禅に出会って、そして帰ってくる。こういった境界を超えて行くというダイナミックな行為がなければ、果たしてこの曹洞禅というものがこれだけ日本に根付き、これだけ世界に広がっていたかどうかは分からない訳ですね。つまりその結論の所だけをとってきて、さあその結論のことだけをやるのがこの曹洞禅、あるいはこの仏教全体ではなくて、まさに常に我々がこれが当たり前だと思ってしまう、私たちの心が引いてしまう、この

閉じられた世界というものの境界を常に超えて行く。その超える運動性の中から、人間をとらえていくという、この考え方こそがその人間の縁起ではないかというふうに思うのです。

まさに、今日はそういうふうに国境を越えたかたがたがここにお集りになってらっしゃる。我々日本人として、仏教はやはり我々のものだ。だからここが本丸であってこのことをここで説いていけばいいのだというのではなくて、この道元禅師にせよ、鎌倉時代の祖師がたにせよ、あるいは最澄、空海にせよ日本仏教はその境界を越えていくその運動性の中にこそ、その本質があったと思えます。そして運動性の中にこそ常にその時代という現代に生きる。つまり固定化した仏教ではなくて、その時代その時代を現代として真摯に生きて抜いてくというその課題を背負った祖師がた、仏教者達は常にその境界に挑戦し、その境界を越えていったんだ、と。そのことを私は強調し、そして今日境界を越えて活動をなさっているかたがたのお話がこれから続くと思うのですが、そのかたがたのこれまでの大変な功績に感謝すると共に、これからのお話に大いに期待したいと思っております。ここまでが私のお話しとさせていただきたいと思えます。

どうもありがとうございました。



基調講演



プロジェクトダーナ： 私たちのお寺の高齢者を 思いやること

中出慈光
アメリカ合衆国ハワイ州大福寺

ハワイにある他の仏教寺院と同じように、大福寺には高齢の檀信徒がたくさんいます。正確に言えば、81人のメンバーが80歳を越えています。10年以上前から私は、日本語で『敬老者』、ハワイ語では『クプナ』と呼ばれる荣誉ある高齢者たちが必要とする、社会的、精神的、感情的、教育的な取り組みをするプログラムを、大福寺で始めることができるのではないかと考えはじめました。

何年も前、私の夫がカリフォルニア州バークレー市にある大学院にいた時、私たちの娘はバークレー市のユニテリアン・ユニバーサリスト教会の敷地内にある幼稚園に通っていました。私は教会の「The Caring Circle (思いやりの輪)」と名付けられた社会奉仕活動プログラムに所属し、教会のメンバーで1人で生活する高齢者の自宅を訪問する活動をしていました。私は、この素敵な女性が抱えている苦しみとそんな彼女のために教会が配慮と慈悲を向けていることにとても心を動かされ、自分のお寺であるコナ大福寺に帰った時には、高齢者に対する同じようなプログラムを始めることを考えました。

私たち夫婦と子どもたちは、年老いて病弱になった私の母の世話をするため、1996年にコナへ戻りました。母は、これまで通り法要に参加し、大福寺のサンガにつながっていることを望んでいました。母は長年にわたって、自分の自由な時間のほとんどをお寺の法要や活動に参加

することに費やし、婦人会、坐禅会や日曜学校で積極的に役割を果たしてきました。彼女は移動に杖を使用していましたが、次第にそれが歩行器となり、ついには車椅子になりました。それにしたがって、介護の必要が徐々に増えていき、私の家族は24時間の在宅介護をするという現実に向き合い、それを6年半続けました。そして、彼女は人生の最後の4ヵ月間を介護施設で過ごしました。その年月の間、私は彼女が人生で最も大切にしていたこと、つまり彼女の家族とサンガに母がつながり続けているようにすることの重要性を直接体験しました。

また、母の介護をすることは、多くの病気の高齢者、特に家の外に出られない人たちが直面する孤独を私に気付かせてくれました。もしも援助が必要な場合には、自分たちのコミュニティの中で、在宅健康サービス、緊急時のサービス、そしてホスピスといったさまざまな社会奉仕サービスを利用出来ることを知りました。さらに私自身のためのサポートサービスも見つけました。つまり、燃え尽きる寸前にいるような介護士のためのサービスです。私は介護士のためのサポートグループに参加し、自分自身のケアとレスパイト[休息]ケア（高齢者や障害者を介護する家族の負担を軽くするために一時的に施設が預かるサービス）について学び、私自身の健康をそこなわないようにしました。母がこれ以上お寺の法要に参加することができなくなった時、看護婦を退職した婦人会の会長が、日曜日の朝の数時間を母と一緒に過ごしてくれることを申し出てくれました。そのおかげで、私は日曜ダumasクールに子どもを連れていくことができました。その親切な行為に今でも感謝しています。

母の世話をすることによって、私は年老いていく高齢者が直面する困難について、また高齢

者への思いやりを持ったケアとサンガとの繋がりが
必要であるということについて学ぶことが出来
ました。私は当時の大福寺の住持であった田宮
隆児師と話したところ、高齢者に対するプログ
ラムをお寺で始めることに同意をしていただき
ました。私は日曜日の朝に私の母を見てく
れている、ジョイス・セイント・アーナウル
ト氏に協力を求めました。彼女はそんな
ようなプログラムをはじめることにと
ても乗り気でした。このようにして
大福寺の介護サークルは誕生し、私
たちはどのように進めていくかを
検討する必要がありました。

私たちは、数マイルのところにある浄土真宗
のコナ本願寺で、プロジェクトダーナとい
うプログラムのコーディネーターであり、私
たちの法友である片山メアリー氏に問
い合わせました。メアリーは退職した
看護師で、1989年に金沢シム氏と
中村ローズ氏によって始められた、
ホノルル・モイリイリ本願寺の
フェイス・イン・アクション
プログラム“プロジェクトダーナ”
について、私たちのグループに
話しに来てくれました。プロ
ジェクトダーナの任務は、病弱な
高齢者そして身体障害者の人
たちにさまざまなサービス
を提供し、同時に彼らの本来の
尊厳や独立心を持続させなが
ら、配慮、気配りと思
いやりをもって接すること
です。

ダーナ。私たちがサンスクリット語とパー
リー語で慣れ親しんでいるこの言葉は、
日本語では「布施」（「惜しみさ」
もしくは「与えること」）を意味
します。大福寺がこの州全体の諸
宗教合同のプログラムに加わる
なら、プログラムを始める時
だけではなく、必要に応じて
アドバイスをしてくれる訓練
されたプロジェクトダーナ
のコーディネーターから、私
たちのボランティアが訓練と
継続的な指導を受けられる
ことを知りました。立ち上げ
資金を提供してくれた大福寺
理事会のご加護のもと、私
たちはプロジェクトダー

ナに加盟し、最初の会合を2007年10月10
日に開きました。お寺のメン
バーで、マッサージ療法の
資格を持ち、そしてロミロミ
（古代ハワイアン
の医療）の治療者である
ビビアンオンタイ氏は、
大福寺でのこのプログラム
における最初のコーディネ
ーターになることを申し
出てくれました。彼女は、
大福寺のこのプログラム
を「Lei Wili O Na
Kupuna」と名付けました。
これはハワイの表現
で「高齢者たちの結
びついたレイ」を意味
しています。私たちは、
高齢者への活動として、
月に1回、60歳以上の
人をお寺に招待し、
楽しみと仲間との交流
の時間を8時半から
正午まで、社交室
で持つことを決
めました。私
たちは自宅であ
ろうと民間ケ
アハウスであ
ろうと交通手
段を必要と
する人への送
迎を提供し
ました。彼ら
は昔からの
仲間と共に、
彼らのため
だけに整え
られた環
境で一緒に
過ごせる
ことを喜び、
自分たちの
お寺である
大福寺に
いることを
喜んでいま
した。

プログラムへの参加者が
増えたこと
によって、
ボランティア
の数も増え
ていきまし
た。ボラン
ティアの核
になるよう
な、力のある
熱心なグル
ープが形成
されました。
そのグル
ープは、す
ずんで送
迎や料理を
してくれ
たり、活
動を指導
したり、様
々な方法
で高齢者
を支えて
くれるお
寺のメン
バーから
構成され
ていまし
た。ボラン
ティアの
数人は、
彼ら自身
がプログラ
ムへの参
加者でも
ありまし
た。



公認のマッサージ療法士が、サービスを申し出る

そもそもの始まりから、プロジェクトダーナは大福寺のプログラムの中において、最も成功したもののひとつになりました。その成功は毎月の集会で示されるみんなの慈愛によるものです。大福寺のプロジェクトダーナの現在のまとめ役であるジョイス・セイント・アーナウルト氏、エリン・フェルナンデス氏、そして関根嶺子氏は、すべての集会が特別なものになるよう気を配っています。誕生日にはレイ、ケーキとロウソクでお祝いし、栄養のある軽食と昼食は思いやりを込めて調理され、時にはメンバーの庭から採れた新鮮な野菜と果物も使うようにしています。また、マッサージセラピーの免許を持つボランティアは、高齢者がお気に入りであるビンゴゲームをしている最中、部屋の中を歩き、愛情のこもったマッサージを、肩、首、背中に施しています。

コナのホスピスやアメリカ癌学会、地域警察など、様々な地域団体の代表者が、高齢者に関連した問題、例えば詐欺犯罪、癌予防、栄養、自宅の安全対策そして、人生の終末期について考慮すべきことなどについてプレゼンテーションをするために招かれます。他の人たちは、編み物、折り紙、コサージュ作成、料理、そして椅子に座って行う運動を教えています。シニアのための組織的サービスの代表者たちは高齢者IDカードを更新し、高齢者向け医療保障制度や、買い物と診療のためのバンでの送迎サービスの情報を提供してくれます。これらのプログラムを通じて、私たちは、低所得者用食料引き換え券、低所得向け医療保障、そして公共料金の値引きを受ける有資格者である高齢者を見定めることができました。また、数名のボランティアは、さらなる個別サービスを提供しています。例えば、家の掃除、診療予約をした際の送迎、気軽な訪問、家の安全性の評価と教育などです。



椅子に座っての運動

プロジェクトダーナは楽しいものです。春には、スプリング・ハット・パレードがあり、秋にはハロウィンのコスチュームコンテストと感謝祭の昼食があります。装飾と季節ごとの食材は、毎回の集会を特別なものにしてくれます。生涯を通して私たちのお寺のために一生懸命尽くしてくれた高齢者がプロジェクトダーナに参加し、抱擁と笑顔で迎えられ、少しちやほやされることを楽しんでます。彼らは自分たちが、サンガによって愛され、光栄に思われ、感謝されていることを知るので。

プロジェクトダーナは、大福寺の高齢者とボランティアに喜びをもたらしました。それは、毎回の集会のオープニングに歌っている「人生と呼ばれるこの贈り物」という歌に反映されています。輪になって座り、高齢者とボランティア達は喜びに満ちて、「私たちの人生というレイは、絡み合ったより糸で美しい。皆が一つに編まれて、助ける手でできている。人生は素晴らしい。私たちは今という瞬間を生きている。平安を私たちの胸に抱いて、この今日という日を生きている。私たちは、この人生と呼ばれる大切な贈り物を生きている。」と歌うのです。彼らは合掌し、頭を下げ、普回向を唱え、病気や参加することができない友人、またこの世に存

在する生きとし生けるものたちに愛とアロハの波を送ります。



12月に祭日を祝うパーティーが開催され、
みんなが飾り物を作った

愛と配慮、そして尊敬の念をもって高齢者たちのお世話をするという事は、仏教徒のサンガの生活と修行にとって必要不可欠なことです。私たちは大福寺のこのプログラムを提供し続け、高齢者が三宝に密接に繋がりにつづけていられるようにすることを願っています。

プロジェクトダーナは、ハワイの全域でおおよそ30の教会と寺院の超宗派的な連立から成るボランティア介護者プログラムです。プロジェクトダーナについてのさらなる情報については、www.projectdana.org をご覧下さい。



坐禅への脚注 2 坐禅は習禅にあらず(2)

所長 藤田一照
曹洞宗国際センター

坐禅と習禅の「質的な相違」を理解してもらうために、わたしはしばしば「マジックアイ」を例として持ち出すことにしている。

「マジックアイ」というのは、コンピュータで作られた二次元の繰り返しパターンの図柄で、それをある見方でじっと見ていると、その絵の中からそれまでまったく見えていなかった別の絵が浮かんできたり、絵そのものが立体的になって見えてくるというものだ。日本では「眼がどんどんよくなる」というふれ込みで人気のようである。読者のみなさんのなかにはきっともうすでに「マジックアイ体験」をされたかたもいるに違いない。図柄の中にはある三次元の絵が隠されているのだが、普通の眼の使い方で見ている限りそれは決して見えてこない。しかし、眼球を動かす筋肉を緊張させ対象に焦点をあわせてものを見つめ何かを探し出そうとする普通の見方をやめて、眼筋をリラックスさせ、探し出そうとする努力をあきらめ焦点をぼかしたような、普段とはまったく別の目（これを「マジックアイ」と言う）でじっと待っていると、それまで見ていたものとは全然違う三次元の絵があるとき思いがけない仕方で向こうからフツと立ち上がってくる。「おっ、やったぞ!」と思ってもっとよく見ようとして元の見方に戻ったとたんその絵は消えてしまう。こちらの見る見方・態度・姿勢と見えてくるものとはぴったり一対のものなのだ。そこにはきわめて厳密な違いがありごまかしは効かない。

この「マジックアイ」という現象が興味深いのは、同じ一つの画像を普段の眼の使い方で見ると「マジックアイ」といわれる眼の使い方で見るとではまったく異なった視覚体験の世界が展開するということだ。「マジックアイ」においていったいどういうメカニズムで三次元の画像が立ち現れてくるのか、わたしは寡聞にして知らないが、それは単なる「心の持ちよう」というような心理的なレベルのことではなく、眼の使い方という具体的な身体的・生理的レベルの違いから起きていることは確かだ。

外から見れば同じ格好をして坐禅をしているようでも、習禅の身心の使い方ですべて坐っている（坐禅が習禅化している）のといわゆる「身心脱落 脱落身心」（坐禅が坐禅になっているときの状態を指す言葉の一つ）といわれる身心の状態ですべて坐っているのではまったく異なった体験世界が展開するということを理解してもらうために、これはとても役に立つ喩えではないかと思っている。道元禅師の主著『正法眼蔵』の古註に「坐禅のときは坐禅の我にてこそあれ、日来(ひごろ)の我にてはなきなり」という一文があるが、このなかの「我」を「身心」に入れ替えてみればまさに同じことを言っていることになる。つまり、「坐禅のときは坐禅の身心にてこそあれ、日来(ひごろ)の身心にてはなきなり」ということである。

この「普段の眼」と「マジックアイ」のそれぞれの特徴と両者の違いを拡張して「普段の身心」と「マジックアイ的身心」という二つの身心のあり方を想定し、習禅は前者で行なわれ、坐禅は後者で行なわれるという具合に対応づけてみてはどうだろうか？ 普段の身心の使い方というのは、まずあらかじめ目標を設定し、その実現に向けて身心を一定の方法によってコントロールし、目標と行為の結果とを比較考量しながら徐

々に両者を一致させるように意識的に努力するというやり方だ。何をやるにしてもそこには「～という目的のために・わたしが・身心を・（意識的に）作動させる」という基本構造がある。習禅の場合であれば、～のところに「禅定」というあらかじめ記述可能な一定の状態が当てはめられ、数息観とか随息観、スキャニング、ラベリングといったさまざまなメソッド（道元禅師は「拂拭(ほっしき) (そうじ) の手段」とよぶ) にしたがって身心がその目的の方向に向かって意識的・計画的に用いられていくことになる。それは一言でいうなら「自調の行(セルフコントロール) (自分で身心の調整をする)」であり、目的を達成するためになにかの手段を積極的に「やっていくdoing」アプローチである。

これとは逆に「マジックアイ的身心」はふだん気づかないでやっている「やらなくてもいいこと」や「やるべきではないこと」を「やめていくundoing」アプローチだと言えるだろう。身体面で言うなら余計な緊張が緩んで深いリラックス状態が実現していることであり、心理面で言うなら普段のような心の積極的運び出しが止んでいて（道元禅師は「心意識の運転をやすめ」と表現している）、身心ともにゆったりと「憩(いこ)って」いるのだ。道元禅師に「ただわが身をも心をもはなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、ころもつひやさずして、生死をはなれ、佛となる」という文章があるが、これこそまさに「マジックアイ的身心」の見事な表現になっている。だから坐禅は「自力の仕事」であってはならないし、本質的に坐禅は自分の力で直接にそれを「する」ことができないようなものだ（瑩山禅師の『坐禅用心記』には「只管打坐して

一切不為なる、是れ坐禪の要術なり」とある)ということになる。

この点からすれば、坐禪の指導において「背筋を伸ばしなさい」とか「眼は半眼にしなさい」(調身)、「吐く息を長くせよ」、「呼吸は腹式呼吸で」(調息)、「なにも考えないように」、「呼吸に注意を集中して」(調心)といった具合に、「～せよ」という言い方がしばしば見られるが、これはおおいに問題ありということになりはしないだろうか？坐禪は不為(つくりごとなし)の結果として内側から自然にそのつど新しく自由に「生成してくる」ものであって、外側から一定の出来合いの鑄型に身心をはめ込んでいって強制的に「つくりあげる」ものではないからである。よくおこなわれているような他律的な指導法では坐禪が習禪化してしまうことは避けられないのではないか？たとえば、坐禪では「背筋を伸ばす」のではなく「背筋が伸びる」のでなければならない。詳しい議論はここでは避けるが、「背筋を伸ばす」場合には「外筋」と呼ばれる「<する doing>ための筋肉(随意筋)」が意志的に使われる(目的運動システム)のに対し、「背骨が伸びる」時には「内筋」と呼ばれる「<いる being>ための筋肉(不随意筋)」が自律的に働いている(支持運動システム)(ジェレミー・チャンス『ひとりのできるアレクサンダー・テクニーク』誠信書房刊 参照)。

われわれにおいては、しばしば外筋による余計で無駄な緊張のせいで内筋の本来のはたらきが邪魔され抑圧されている。だから外筋の余計な緊張を「やめる」ことによって、われわれのからだがかもともと備えている内筋の働きが再活性化されフルに発現されるようになることが必要なのだ。本来内筋が果たすべき役割を、ことあるごとに外筋が出しゃばってやっつけてしまおうと

するところ(外筋と内筋の不調和・葛藤)にわれわれ人間の抱える根本的な問題があるといえるのだが、それは坐禪(内筋的)が習禪(外筋的)ではないということと密接に結びついているように思われる。それはさておき、同じこと(「自然にそう成るのは良いが、人為的にそう為すのは悪い」)が背筋だけではなく、頭、眼、手、腕、胴体、脚など坐相のあらゆる部位、呼吸(いき)、さらに心のありかたすべてについても言われなければならない。坐禪においてはなにか特別な呼吸法を実施して息をコントロールするのではなく、正身端坐している身体の生命活動である自然の呼吸そのままのありかたにすべて任せるだけだ(道元禪師は「鼻息微通」とか「出息入息 非長非短」と言うのみで「しかじかの仕方呼吸をせよ」とは言わない)。

「外筋-内筋」という考え方は身体の働きに関してのものであるが、わたしは心のはたらきについてもこの考え方を使えるのではないかと思っている。つまり普通にわれわれがあれこれと思案をめぐらしたり、ああだこうだ考えるのは「外筋的な心のはたらき」(日常語で「アタマを使う」と言う)であり、それに対してそのような思念の起滅自体を基底で支え、いわゆる「直観」や「気づき」、「マインドフルネス」を可能にしているのが「内筋的な心のはたらき」と言えるのではないだろうか。ここでもやはり坐禪は「外筋的な心のはたらき」の過剰な活動を鎮め、それによって邪魔され抑圧されていた「内筋的な心のはたらき」を活性化し発現させることなのだ。だから道元禪師が「念・想・観の測量をとどむ」と言っている様に、坐禪にさまざまな瞑想技法、たとえば四念処法、日想観、阿字観などを外から持ち込んで「内職」をしてはならない。このような技法を実践するとき心は必然的に能動的なものになり、「外筋的な心のはたらき」主導モードになってし

まう。心はどこ特定の場所にも集中（凝固）していない、身体の内外に均等にやわらかく広がっていて、さまざまな感覚情報（念の起滅も含む）を淡々とただ静かに受信している、どのような情報を受けてもそれに対してリアクションを起こしたりコントロールしようとするのはさしひかえられている・・・これが坐禅における心の「内筋的はたらき」主導モードのありようである。

さて、坐禅の特色を指摘するのに「マジックアイ的身心」だとか「外筋・内筋」といった、奇妙な喩えをながながと持ち出してきた。それは、われわれにとっては習禅的なアプローチはわかりやすくなじみが深いものであるのに対し、坐禅を坐禅として行じるそれとはまったく質の違ったアプローチの方はどうも納得しにくくなじみがうすいからだ。そのためにあれほど道元禅師が熱心に勧めた＜習禅ではない坐禅＞が見失われてきてい

る。これが坐禅だと思いながら実は習禅を一生懸命にしている、あるいは坐禅が形骸化して形のとりにくろい、真似になってしまっている・・・。そういう状況を少しでもなんとかしたいという思いから、浅学菲才を省みず今回、筆をとらせていただいた。わたしにも「これだ！」という解決策が見えているわけではない。ただ、「坐禅のとき坐禅の身心になる」と言われるが、それはどのような身心なのか、どのような筋道でそのような身心が現成するのか、それを少しでも掘り下げて表現しようとするところから始めてみるのがいいのではないかと思い、自分なりに探究を進めている。坐禅を凡夫の行なう単なるトレーニングやエクササイズとしてではなく、どこまでも「一超直入如来地（一足跳びに仏の位を証すること）」の宗教的行、仏祖の行履（あんり）（おこない）の型（かた）として現代のわれわれが実修できるような道を拓いていきたいと願いつつ。

国際ニュース

曹洞宗宗立専門僧堂

石川県永光寺において、平成23年9月1日～11月24日まで開単され、14名が安居しました。

ヨーロッパ国際布教総監部主催研修会

期日：2011年10月14日～16日
場所：フランス共和国・禅道尼苑

南米僧侶研修会

期日：2011年10月31日～11月4日
場所：両大本山南米別院仏心寺

南アメリカ国際布教師会議

期日：2011年11月4日
場所：両大本山南米別院仏心寺

ハワイ管内布教師春期定例連絡会議

期日：2012年2月18日
場所：両大本山布哇別院正法寺

南アメリカ国際布教師会議

期日：2012年2月22日
場所：両大本山南米別院仏心寺

第8回曹洞宗ハワイ・北アメリカ檀信徒大会

期日：2012年3月9日～3月11日
場所：アメリカ合衆国ハワイ州
アラモアナホテル

曹洞禅ジャーナル 法眼(年2回発行)

編集兼発行人 藤田一照

発行所 曹洞宗国際センター

Soto Zen Buddhism International Center

1691 Laguna Street, San Francisco, CA 94115 Phone: 415-567-7686 Fax: 415-567-0200